

秋分の日

校 長 武井 正明

彼岸前、妻が1階の箆笥を整理していたら、母が作った刺繍画が出てきた。

それはまだ母が若く元気な時、刺繍で作った虎の画だ。今のおばあちゃん世代の方々なら馴染みがあるかもしれない。昔、刺繍画はけっこう何処の家でもやっていたものだ。

子どもの時、それを見ながら、おかあさん上手だなあ…と幼心に感心したものだ。

捨ててはいないはずだけどなあ…。それが出てきた。

川の岩場から出てきた、虎の大きな二つの眼が、私を射るように見つめる。まるで「俺を和室に飾ってくれ!!」と訴え掛けているようだった。

すぐに和室の仏壇の向かいに飾ってみた。…いいじゃないか。

写真のふたりが、嬉しそうに笑っている。



吉中の皆さん、授業で作った美術や技術作品、どんなに不出来なものでも、それはあなたが作ったもの。自分が作ったものは、自分の分身です。丁寧にいつまでも大切に保管しておいてほしい。きっといつか時を経て、懐かしく甦る時が来るかもしれません。

そしてもうひとつ。

段ボールの包みだけ。妻が見たところ、この大きさはマットか何かを包んだ跡だという。宅急便の発送元は加茂のアパートになっていた。

そういえば結婚して間もない頃、台所が寒いと母が言っていたので、軽い気持ちでホットカーペットを買って寺尾に送ったことがあった。

それはきっと、カーペットを包んでいた段ボール紙に違いない。

現物ではなくて、包みの段ボール紙を捨てられないなんて、親父らしいなあ…。

親になればわかる。我が子の贈り物がどれほど嬉しいか、愛しいか。カネではない、気持ちが嬉しいのだ。父の日に娘がくれたスコッチウイスキーを、一昨日やっと開けた。

あれだけ暑かった毎日が嘘のような、ここ数日の爽やかさだ。

和室の仏壇に、虎を背にした二代目住職の、いい声を通る。

彼岸とは、故人というよりも、遺された家族のためにあるのだろう。墓の前で手を合わせ、丘から越後平野を眺め、秋から冬に向け気持ちを整える。

明後日は体育祭だ。2年生諸君の健康状態が気になる。明日の様子を見て、出来る限り多くの吉中生がベストコンディションで当日を迎えられるように、最善を尽くしたい。